

韓国の伝統仮面劇にみられる風刺の様相

張 起權 (チャン キグオン)

要旨

朝鮮王朝後期の朝鮮半島では、増大していく社会的混乱の中で、封建社会の基盤を成していた厳格な身分制度にも次第に変化が生じる。文化・芸術的な分野においても実学思想の動きがあらわれるが、特に文学においては、既存の理想主義的な風流文学の流れに反し、実生活を表現し、また批判する風刺文学が出現する。

当代の風刺文学の中でも、仮面劇「タルチュム」にみられる風刺は最も痛烈で、批判精神に満ち溢れている。タルチュムは民衆によって生まれた芸術であり、その中には当時の民衆の主な関心事がそのまま描かれている。とりわけ階層間の対立問題と葛藤構造が浮き彫りにされ、支配層への批判がタルチュムという喜劇を通して表出されている。

タルチュムの中には、「狂言」の太郎冠者のような、喜劇中の下男像の典型である「マルトゥギ」が登場する。お調子者で反骨的なマルトゥギによって、主である「両班」^{ヤンバン}は弱点を突かれては嘲弄され、風刺の槍玉にあげられる。諧謔に富んだ風刺により、両班の掲げる地位や学識、道徳の矛盾に対して疑問を投げかけ、愉快な笑いを飛ばす。

朝鮮王朝の厳格な封建社会において、社会風刺に富んでいるタルチュムの内容は、抑圧されていた庶民の鬱憤を発散し民衆意識を高揚させることに、非常に重要な役割を果たしていたのである。

キーワード…タルチュム、風刺、マルトゥギ、両班

はじめに

朝鮮王朝⁽¹⁾の身分体系は非常に厳格で、世襲を原則とし、各階層間には確固たる境界と隔たりがあった。支配階層であった両班⁽²⁾はみずからの権力維持のため、下層民に対し厳しい抑圧を行っていた。また両班は、土地や禄俸⁽³⁾の受給、税金や兵役の免除など、政治・社会・経済的に優遇される特権階級であった。

しかし17世紀に入ると、度重なる外国からの侵略を被った朝鮮王朝では、社会的混乱が増大し始め、封建社会の基盤を成していた厳格な身分制度にも次第に変化が生じることになる。また同じ時期、中国においては明の滅亡と清の創建に伴い、空理空論に没頭する朱子学が排斥され始め、現実と事実に基づく実証的学問が提唱されるようになる⁽⁴⁾。

朝鮮半島でもこのような変化を受け、社会・経済のみならず、文化・芸術的な側面においても実学思想の動きがみられるようになる。とりわけ文学においては、既存の貴族主義に基づく理想主義的な風流文学の流れに反し、実生活を表現し、また批判する風刺文学が出現することになる⁽⁵⁾。

当代の風刺文学の中でも、仮面劇「タルチュム」にみられる風刺は最も痛烈で、批判精神に満ち溢れている。社会風刺に富んでいるタルチュムの内容は、既成の秩序を批判し、新しい価値観を普及していく格好の表現様式であった。朝鮮王朝の厳格な封建社会において、抑圧されていた庶民の鬱憤を発散し民衆意識を高揚させることに、タルチュムは非常に重要な役割を果たしていた。

タルチュムには、仮面劇、伝統舞踊、鎮魂祭、豊穰祈禱、口承文学など様々な要素が含まれているが、本稿では、「風刺文学」としてのタルチュムに着目し、その痛烈な風刺の様相について分析を行うことにする。引用する台詞の原文は韓国文化財保護協会編『タルチュム台詞集』をもとにしており、本稿では筆者が日本語に翻訳したものを記載する。

タルチュムは全国的に十数種類が点在しているが、本稿で分析の対象にするのは以下のタルチュムである⁽⁶⁾。

- ・河回タルチュム ハフエ
- ・鳳山タルチュム ボンサン
- ・殷栗タルチュム ウニェル
- ・楊州タルチュム ヤンジュ (楊州別山臺ノリ)
- ・東萊タルチュム トンネ (東萊野遊)
- ・水宮タルチュム スヨン (水宮野遊)
- ・統營タルチュム トンヨン (統營五廣大)
- ・駕山タルチュム カサン (駕山五廣大)

1、風刺の主演「マルトウギ」

タルチュムでは「幕」の概念として「マダン」という区切りが用いられ、ほとんどのタルチュムは「両班マダン」、「破戒僧マダン」、「老翁マダン」などで構成されている。このうち、「両班マダン」の中に痛快な風刺が最も多く盛り込まれており、ここでは下男役の「マルトウギ」という人物が登場し風刺の重要な役割を担っている。マルトウギの「マル」は馬を意味し、登場する際にも馬の鞭をもってあらわれることから、両班の屋敷に住み込みで働く馬番の下男であることをうかがわせる。

マルトウギはヨーロッパの喜劇「*commedia dell'arte*」に登場するずる賢い召使いや、狂言の太郎冠者に相当する喜劇中の下男像の典型である。お調子者で遊び好き、反骨的で時には攻撃的なマルトウギによって、両班は弱点を突かれては嘲弄され、風刺の槍玉にあげられる。主君への絶対服従の時代において、両班に対するマルトウギの挙動は、決して礼儀をわきまえた従順な行動ではない。例えばマルトウギは、両班が呼んでもなかなか素直にあらわれず、一方の両班は、マルトウギに悪口を言われなかつと常にびくびくしている。また両班の行動に関するマルトウギの叙述は卑語、俗語および悪態によって行われるのがほとんどである。

タルチュムでは台詞の他にも舞や仮面などによって、類型化かつ戯画化された人物像が作り出されるが、中でも特に舞は、登場人物の性格だけでなく、その後の行動や身に降りかかることまでも暗示する役割を果たしている。民衆の代弁者であるマルトゥギの舞は、力強く意気揚々としており、劇中における強者であることを知らしめている。一方、風刺や揶揄の対象である両班の舞は、現実にそぐわない不自然で滑稽なものとなっており、劇中での性格や役割を暗示している。

また仮面は、それを用いる登場人物の役割や特徴を視覚的にあらわす機能を果たしている。例えばマルトゥギ面は非常に諧謔的な雰囲気にあふれている。特に「野遊」と「五廣大」のマルトゥギは、仮面の大きさ自体が他の登場人物のものよりずっと大きい。さらに鼻も顎まで届くほど大きく、男性器を想像させるような形態をしている。「水宮野遊」の「両班マダン」では、険悪な形相の仮面で登場し、「統営五廣大」の第二マダンでは頭に平涼笠をかぶり、馬鞭を持つてあらわれる。こうした仮面が、まさに若く活発で反骨的なマルトゥギの特徴をよくあらわしている。

このようにマルトゥギはタルチュムにおいて、最も積極的かつ攻撃的な役割を果たす登場人物である。マルトゥギは両班家の下男であり、現実社会においては人間的待遇を十分に受け得ない存在であるが、劇中ではそれが逆転して強者の立場に立っているのである。

2、風刺の醍醐味、言語遊戯

マルトゥギによる両班風刺の手法は、やはり何よりも言語遊戯によるものが最も顕著にあらわれる。タルチュムの台詞に用いられる言語表現は多岐にわたっており、庶民が日常的に用いることばや俗語の他に、故事成語や詩歌なども含まれている。タルチュムは、庶民を対象に、庶民によって演じられる芸能であるがゆえに、両班の趣向に合わせなければならぬという制限がなく、庶民の視点で好きなように言語を駆使することができる。

また社会における葛藤構造を滑稽に描き、風刺するというタルチュムの性格上、露骨な表現や卑俗な言い回しが頻繁に用いられるのも特徴的である。特に風刺の主役であるマルトゥギの台詞には過激なものが多く、女性の観客は彼が登場するマダンになると、席を外すことも

あつたと伝わる。

タルチュムの中の言語遊戯の一例を「楊州別山臺ノリ」の中から挙げてみよう。両班のセンニムが下男のセツトウギ(7)に向かって名前を尋ねる場面があるが、センニムはセツトウギの悪知恵に騙され、セツトウギを父（アボジ）と呼んでしまう。

○センニム…名前は何と申す。

○セツトウギ…わしの名は、名字がアという字で、名前がボジだ。

○センニム…ア・ボジ？どこかで聞いた名前だなあ！

○セツトウギ…そうだろう。大きい声でいってみろ。

○センニム…アボジ。

〔楊州別山臺ノリ〕

また同じように、同音異義語による意図的な言い間違いにより、マルトウギが両班を息子と呼ぶ場面もある。特に親子関係など、年功序列が厳格に守られる儒教社会において、両班はマルトウギに息子と呼ばれたり、父と呼ばざるを得ない状況に陥り、自らが弱い立場に追い込まれることになってしまうのである。

また多くの場面で用いられ嘲弄の道具となるのが、両班ヤンバンということばそのものである。次の例は、マルトウギが両班ヤンバンということばで言語遊戯をし、両班をからかう場面である。

○マルトウギ…シイター、両班のおなーりー。両班といっても、ノロン(8)、ソロン(9)

を全部やってきたお偉い両班のことだと思ったら大間違い。ケジャルヤン（犬の毛皮でつくった座布団）のヤンに、ケダリソバン（犬の足のように曲がっている

ちやぶ台)のバンと書く、ヤンバンのおなりだよ。

○両班ら…こ、こいつ、何だと。

○マルトウギ…あれ、この両班、耳が悪いんですかね？あつしは、ノロン、ソロンを

全部やってきた、お偉い両班三兄弟のおなりだと言ったんですよ。

○両班ら…ふむ。

〔鳳山タルチュム〕

両班という言葉は、もともと身分制度上の両班階級に由来するものであるが、日常語では一般的に「この両班が」は「この方が」という意味で用いられる。また「あーあ、この両班どうしてこうなんだ」という場合、両班は「この人」や「こいつ」となり、卑下の意味を含んで用いられることもある。

マルトウギは「この両班」という単語を巧みに使用し両班をたてながらも、実際には卑下の意味を込めていることを観客にわからせる。上の例で最初に用いられた「両班」は、一見両班の登場を知らせる本来の意味で用いられているようにみえる。しかし、尊敬を表すべき場において用いられる称号である「センウォンニム」あるいは「チンサンニム」の代わりに、階層一般を表す名称を使用することによって、マルトウギが両班を尊敬の対象として扱っていないことがうかがえる。

また、その次に用いられる尊敬語表現の動詞「おなり」についても、抑揚によってはその動詞の主体を嘲弄の対象とし得る。二番目、三番目、四番目に用いられる「両班」は、単語そのものは本来の意味で用いられているが、文脈の中で両班が戯画化されており、五番目の「両班」は前述したように、「この人」「こいつ」の意味として理解することができる。

また両班の身分を下げる手段として、マルトウギはしばしば比喩を用いる。比喩の対象は主に動物や、とるにたらない物、あるいは性的なものである場合が多い。先の例では両班の「ヤン」が「犬の毛皮でできた」座布団に喩えられ、「バン」が「犬の足ののように曲がった」ちやぶ台に喩えられている。比喩の対象となるものの価値が下がれば下がるほど、比喩の主体も格下げされることになるのである。

次の例では、同様に「パン」という音をもじって、両班が「チョッパン（男性器）」「チョルパン（半分）」「ソパン（ちやぶ台）」「ペッパン（白飯）」に喩えられている。

○両班ら…これ、マルトウギ！

○マルトウギ…チョッパン（男性器）だか、チョルパン（半分）だか、ソパン

（ちやぶ台）だか、ペッパン（白飯）だか知らないが、えらそうに…。

〔鳳山タルチュム〕

このようにタルチュムの中で最も頻繁に用いられる言語遊戯は同音異義語の使用であり、しばしば意図的な言い間違いとして用いられる。上記の引用で見られるようなマルトウギと両班の言語遊戯的な対話構造は、形態を変えて様々な部分で繰り返される。マルトウギは攻撃的な言葉を駆使するが、両班が威厳を振りかざすと一旦ひるみ、マルトウギは攻撃を修正する。攻撃と後退を繰り返しながら、大抵はマルトウギの後退に終わるが、それは形式的なものであり、マルトウギの攻撃は効力を保っている。そして両班はマルトウギが退くのをみて安心するといった構造が何度も反復されるのである。

このように言語遊戯が多く用いられる理由としては、もちろん庶民生活を赤裸々に描くためであると同時に、両班が好むパンソリ⁽¹⁰⁾にあらわれるような、支配層の趣向に合う洗練された表現形式を故意に避けた、タルチュムの持つ反骨的な性質とも関連している。劇の中においてあえて卑俗な言語表現形式を選択することにより、両班への反抗心を存分に発散させていたのである。

タルチュムの主題は社会階層間の葛藤であるが、それが描かれる形式は決して悲劇的なものではなく、そうした鬱憤を一気に笑い飛ばしてしまうような完全なる喜劇である。したがって言語表現形式も、喜劇的な風刺、諧謔、機知に富んだものがふんだんに用いられ、タルチュム独特の滑稽美を創り上げている。

3、主の命令に対する拒否

両班に対する風刺の基本的な形態は、主である両班の命令に対するマルトウギの不服に満ちた言動からあらわれている。まずマルトウギは、両班が呼んでも決して素直にこたえたり、すぐに出てきたりはしない。両班の命令が聞こえてくると、マルトウギはわざと他の事をやり出したりして、しばらく知らないふりをする場合が多い。また命令とは関連のない不必要な台詞や両班に対する不平不満を並べたりする。両班はマルトウギを叱責しながら、再び命令を与える。結局マルトウギは両班の命令にしぶしぶ従うが、それは形式的な行動に過ぎない。両班マダンにおいては、両者によってこのような攻め合いが頻繁にくり返される。両班にはマルトウギに対して自分の命令を即時に従わせる影響力がないのである。このように両班の命令体系が順調に履行されないとことから、その威厳が損なわれていく。例えば「鳳山タルチュム」には次のような場面がある。

○両班ら…これ、マルトウギよ。

○マルトウギ…(聞こえないふりをして立っている)

○両班ら…これ、マルトウギ!

○マルトウギ…チョッパン(男性器)だか、チョルバン(半分)だか、ソバン

(ちやぶ台)だか、ペッパン(白飯)だか知らないが、えらそうに…。

○センウォン…マルトウギ、こいつめ、両班をお連れしたなら、はやく良い宿を

見つけてこぬか。一体どこをほつつき回っておるのだ。

○マルトウギ…へい、もう見つけておきました。

(鞭で土に円を描き、一回りしながら)

額ほどの場所に木の柵を打ち、門は空に向かってついている、そんな宿をとっておきました。

〔鳳山タルチュム〕

このように両班は威張りながらマルトゥギを呼びつけて、あれこれ命令を下すが、その命令は即座に受け入れられず、むしろマルトゥギによって両班を嘲弄する言動が繰り返られる。

ノリパン⁽¹⁾を見物に来た両班が、マルトゥギによい宿を取るよう命令するが、まるで豚小屋を連想させるような場所を見つけてくる。比喻を用いてマルトゥギは両班を豚に見立て、格下げしているのである。これに気付いた両班に怒られたマルトゥギは、言い逃れをしながら両班の地位に相応しい宿を取っておくという。しかしまた次の場面では両班を懲らしめる方策を立てるなど、攻撃を試みる。

両班はマルトゥギが誘導する状況に陥っていくが、どうしようもなかっただ「マルトゥギ、こいつめ！」とくり返すのみである。それに対してマルトゥギは臨機応変に両班の攻撃を逃れながら、両班に対する風刺を意のままに展開していく。叱られれば再び後退し、わざと言い間違いをした部分を修正しながら言い逃れをし、両班の態度が和らげば再三攻撃に取り掛かるといった具合に、攻撃・後退作戦がくり返される。マルトゥギとの口げんかに勝算のない両班は、マルトゥギの言い訳を信じ込み満足するが、観客にはそれがまた別の風刺だということがわかる。マルトゥギはいったん攻撃を取り消し後退するが、それは表面的なものに過ぎないのである。

また、両班は理解能力もマルトゥギに劣っている。威厳や体面を優先的に考えるため、実際にはマルトゥギにからかわれていても、その事実さえ認識できない場合もある。したがって、マルトゥギが用いる手法は両班の威厳を立てているようでありながら、実はおとしめているのである。

少しでも威厳が傷つけられると両班の関心はそれに集中し、威厳を取り戻すためにさらに厳しく怒鳴りつける。マルトゥギは一步後に引いて自らの言葉を取り消しながら、一方では新たな攻撃を試みる。つまり両班の威厳に押されたマルトゥギは、一時的に後退し命令に服従するかのように見えるが、次の場面では、マルトゥギの攻撃が再び展開されるのである。

両班は最後まで、マルトウギが形式的に命令に従っているという事実¹に気付くことができず、マルトウギの言動に納得するようになる。つまり下男の反抗を感じ取ることができないか、あるいは仕方ないと諦めているのである。ここに両班風刺のもう一つの側面が潜んでいるといえる。

4、両班の身分や出身に対する嘲弄

両班が最も重要視するみずからの出身や家系に対しても、風刺が集中している。この階級は朝鮮王朝の厳格な身分制度によって規定された特権階級であり、特別な能力がなくても民衆の上に君臨することができた。

しかし、社会的混乱が増大していた朝鮮時代後期、当時の民衆の目に映った両班は、尊敬できる存在ではなく、買官買職や派閥抗争に明け暮れる、批判すべき対象であった。

言語遊戯の例としても取り上げた次の場面は、マルトウギがノロン、ソロンという朝鮮時代の派閥名を官職名と混同したふりをしながら両班を嘲弄しているところである。

○両班：こ、こいつ、何だと。

○マルトウギ：あれ、この両班、耳が悪いんですかね？あつしは、ノロン、ソロンを

全部やってきた、お偉い両班三兄弟のおなりだと言ったんですよ。

○両班：ふむ。

〔鳳山タルチュム〕

ノロン、ソロンとは派閥の名前であって、地位をあらわすものではない。表面的には派閥と官職を区別できないマルトウギの無知ぶりが

露わになったかのようにみえるが、これは類似語を並べることで喜劇性を高めるといふ効果とともに、庶民の暮らしは眼中になく派閥闘争を繰り返す、当時の両班に対する風刺の意味が込められているのである。

「楊州別山臺ノリ」や「鳳山タルチュム」では、内実の伴わない両班階級の虚勢ぶりが露わにされるが、両班の身分自体は疑問の対象にしていない。ところがタルチュムの中でも「野遊」や「五廣大」の場合、より痛烈に、両班や両班夫人の不貞にまで言及しながら、両班の血統そのものを皮肉る場面が多く盛り込まれている。

○マルトゥギ…一番目の両班は、芸妓の子孫…。

二番目の両班は、母方が飲み屋の女か女僧…。

〔統宮五廣大〕

○両班…(他の両班を指して)かたつばは水原の白家、

もうかたつばは南陽の洪家の血が混じった妾の子…。

〔固城五廣大〕

このようにマルトゥギは両班の疑わしい出身に対して嘲弄しながら、一方では自分の祖先の正統性を長々と主張したりもする。これは、演劇としては、喜劇的な手法におけるほら吹き⁽¹²⁾の典型的な人物をあらわしていると理解されうるが、朝鮮後期に政治的および経済的な理由で地位が下落した両班階層を暗示しているとも考えられる⁽¹³⁾。

タルチュムにおいて、両班の出身や血統に対する話題が数多く取り上げられているということは、実際に朝鮮末期に入り、血統の正統性を主張する両班の出身に、相当数の虚偽が混ざっていたことも関連がある。例えば、朝鮮時代の厳しい身分体系の中で両班から差別待遇を受けていた庶子⁽¹³⁾出身や吏属階級のうち、とりわけ経済的な基盤を整えた勢力は次第にその影響力を拡大していた。その反面、政治・経済

的な要因で没落した両班は、常民に転落したり、あるいは両班としての影響力を行使できなくなることが多発した。

このような混沌とした社会情勢がタルチュムの中にも反映され、階層間の利害関係をめぐる対立が喜劇という仮想空間の場で可視化するとみることができる。

5、直接行動や超人的存在による懲戒

時には、ことばによる間接的な風刺や嘲弄を超えて、直接的な行動による攻撃が行われることもある。マルトウギが両班の仮面を鞭で打ちながら登場したり、両班に直接殴りかかる場面などがこの類である。

次の例は、「駕山五廣大」でマルトウギが両班に直接的な攻撃を加える場面である。

○マルトウギ…(急に両班の方へ走り寄り、馬の鞭で両班をたたきながら)

こいつ、豚野郎め。どう、どう。

〔駕山五廣大〕

また「統宮五廣大」にも同様の形態がみられる。鞭を持っているマルトウギの前に両班たちが頭を下げて並んでいるシーンである。

○マルトウギ…我々下人よりも劣る奴らが、

わしらに向かつていつもこいつ、あいつと呼ぶのはけしからん。

こいつら、早くひざまづいて許しを乞わないか！

○両班一同…許して下さい、許して下さい。

私たちを哀れに思つて命だけはどうか：

〔統営五廣大〕

またマルトゥギのような下男以外にも、両班風刺の役割を担うものとして「ヨンノ」や「ビビ」という空想上の生き物が登場する。これは怪物や妖怪のような格好であらわれ、両班を捕まえて食べようとする。その姿は、顔は青く、身は青地に赤や白の模様のある龍のような姿をしている。四神獣である青龍・白虎・朱雀・玄武のうち、青龍に当たるものであると思われ、龍神信仰や辟邪信仰において登場する神格仮面の一種であると考ええる。

「統営五廣大」の中には、ヨンノが両班を脅しながら、自分の存在を自ら説明する場面がある。

○ビビ両班¹⁵・ヨンノといえは空にいるものだろう。

何しに地上に降りて来たんだ。

○ヨンノ…地上に降りてきたのは他でもなく、

両班の行いが悪いから捕まえて食べようと思つてさ。

今、九十九の両班を食べたところだが、

あと一つ食べて百になったら、また空に登って行くわけだ。

〔統営五廣大〕

タルチュムの中でヨンノは、人間に害を与える獣としてではなく、民衆を苦しめる両班を懲らしめる存在として登場するのである。すなわち正義の味方に立ち、社会の不条理や差別を追放する存在なのである。

両班はヨンノに捕まえられて食べられたり、あるいはやつのことで逃げ出したりする。例えば次の例は、両班が恐怖のあまり、自分自

身の存在までも否定するという状況に追いやられていく場面である。

○ビビ両班…(ヨンノを振り返って、不思議そうに) 貴様は何者だ？

○ヨンノ…わしは何でも食うヨンノだ。

これまで九十九人の両班を食べてきたから、あと一人で百になる。

○ビビ両班…(怖くなって後ずさりしながら) わ、わしは両班ではないぞ。

○ヨンノ…だったら、何だというのか？

○ビビ両班…わ、わしは、糞だ。

○ヨンノ…糞なら、もつとよく食べるぞ。

○ビビ両班…わ、わしは、犬だ。

○ヨンノ…犬なら、おいしくてもつといい。

○ビビ両班…わ、わしは、豚だ。

○ヨンノ…豚なら、一口でパクリだ。

〔東萊野遊〕

このように超人的な力を持つヨンノやビビは、両班を地上の悪すなわち災難と見なし、彼らを懲らしめ退けることで、疫神を退治する役割を果たしている。タルチュムにおけるヨンノやビビの登場は、悪徳な存在である両班の存在自体を否定するという民衆の夢を映し出した、超自然的な力のあらわれであるといえる。

空想上の生き物が主に登場する「野遊」や「五廣大」において特記すべき点は、「駕山五廣大」を除けば「ヨンノマダン」が「両班マダン」のすぐ次に設けられているということである。「両班マダン」でマルトウギに懲らしめられた両班は、次の「ヨンノマダン」でもヨン

ノによってさらに窮地に追い込まれる。「水宮野遊」と「架山五廣大」では、両班がヨンノに食べられてしまうほどである。

「架山五廣大」では、ヨンノが両班を食べた後、狩人に打たれて倒れてしまう。日常的には両班を打つなど到底できることではないため、タルチュムの中でヨンノを通して両班征伐を行っている。「水宮野遊」や「架山五廣大」における両班風刺は、風刺に止まらず、まさに両班の処罰という結果までも提示しているのである。

当代の観客は、ふだん自分達の上に君臨していた両班が窮地に陥り、自らを両班ではなく犬や豚であると言いながら逃げ惑うのを見て、痛快な笑いを飛ばしたであろう。権威社会において実現し得ない願望が、人間社会に存在しない超人的な力によって叶えられるのである。

おわりに

以上のように朝鮮時代後期における風刺文学の中でも、仮面劇「タルチュム」にみられる風刺は最も痛烈で、批判精神に満ち溢れている。タルチュムは民衆によって生まれた芸術であり、タルチュムにあらわれる問題はすなわち当代の民衆が抱えていた問題である。したがって、タルチュムには当時の民衆の主な関心事がそのまま反映されているのである。

当代の庶民にとって何よりも強い関心の対象になっていたのは、階層間の対立問題、すなわち両班と庶民の間の葛藤である。しかし体制的な圧力のため、庶民が両班を直接攻撃することが不可能な状況下において、支配層への批判をタルチュムという喜劇を通して表出していた。諧謔に満ち溢れた風刺により、両班の掲げる地位や学識、道徳の矛盾に対して疑問を投げかけ、痛快な笑いを飛ばしたのである。

民衆はタルチュムを通じて日常の鬱憤を晴らし、喜劇的なカタルシスを感じながら、また厳しい現実の日常に戻っていったのであろう。

注

(1) 一三九二年、高麗王朝の最高実権者であった李成桂によって創建され、「抑仏崇儒」政策をもとに朱子学的政治思想を国家理念とした。

(2) 両班は、朝鮮時代初期においては、文班、と武班、の両勢力を指す官制上の用語であったが、次第に現職の官僚のみならず、上級支配層や儒学的思想を持った知識人一般を指すようになる。

- (3) 一種の禄高。両班が受け取る年金のようなもの。文武十八等級に分類されていた。
- (4) チャン・キグォン「朝鮮時代後期の社会変化と民衆意識の成長」『大手前大学人文科学部論集』第七号、二〇〇七、六二～六四頁参照。
- (5) キム・キドン『李朝時代小説論』(精研社、一九六九) 四五一頁。
- (6) 一般的にタルチュムは、起源となる地名が名称についている。チャン・キグォン「朝鮮時代後期の社会変化と民衆意識の成長」『大手前大学人文科学部論集』第七号、二〇〇七、六九～七〇頁参照。
- (7) マルトウギと同様の立場の下男役。狂言の中の次郎冠者のような存在。
- (8) 老論。朝鮮王朝における党派の一つ。
- (9) 少論。朝鮮王朝における党派の一つ。
- (10) 十八世紀に誕生した口承文芸。一種の唱劇。パンソリのパンとは舞台・場という意味で、ソリは歌・声の意味を持つ。鼓手の伴奏と共に、唱優(歌い手)による語り調の歌が続く。呼吸の合った鼓手と唱優による二人舞台が基本である。ユネスコの世界無形遺産。
- (11) タルチュムなどの演劇が行われる場、舞台。
- (12) 朝鮮時代後期には党派間の激しい権力闘争や経済的な困窮などで没落する両班が増大していた。
- (13) 両班の正室ではなく妾の子孫。
- (14) 両班の下で働く下級官吏。タルチュムなどを主に管轄していた。
- (15) 両班の一種。

参考文献

- 韓国文化財保護協会『タルチュム台詞集』、一九九三。
キム・キドン『李朝時代小説論』精研社、一九六九。
シム・ウソン『韓国の民俗劇』創作と批評社、一九七五。
ソン・オク他『悲劇と喜劇・その意味と形式』、一九九五。
チャン・キグォン「朝鮮時代後期の社会変化と民衆意識の成長」『大手前大学人文科学部論集』第七号、二〇〇七。